

甘藷栽培発祥の地を訪ねて

－ 小石川 － 幕張 － 九十九里 －

いも類振興情報編集部

1. 悲惨な飢饉

飢えは疫病とならび昔から人類が暮らすうえでの最大の脅威で、その悲惨な記録は内外を問わず、枚挙にいとまありません。飢饉は農作物の凶作ばかりが原因ではなく、農民が生産物を自分の意思で処分できず、多くを租税、年貢などで納めなければならないとき、経済圏が狭い範囲に限られ、他の地域からの援助が求められないとき、などにも発生しやすいのですが、やはり農作物の不作がいちばん大きな要因であるといつてよいでしょう。飢饉対策としては、昔から救荒作物を普及させること、ダイコン、豆類の葉などを貯えること、草根木皮の採取利用、などが挙げられていましたが、いずれも根本的な解決策ではありません。

じゃがいも、さつまいもなど、イモ類が日本に導入され、広まるようになってからは、天候が不順なときでも安全に収穫できること、お腹の足しになること、など優れた特性が認められ、幾度か深刻な飢饉に際して多くの人を救ってきました。しかし、これら救荒作物としてもっとも理想的と思われるイモ類も、はじめから人々に受け入れられたわけではありません。

2. さつまいも普及上の苦心

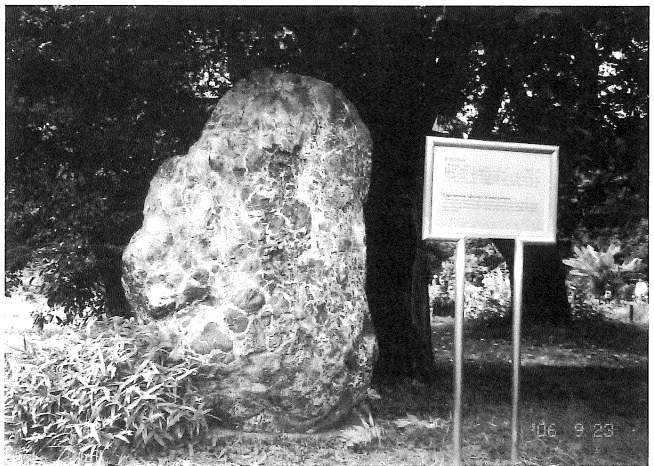
じゃがいもは、旧オランダ領東インドのジャワ島から長崎に導入されましたが、味があっさりとしているために、とくに美味しいとは思われず、はじめのうちはなかなか広まりませんでした。穀類など他の作物の出来が悪いときでも安定してつくれること、腐りにくく貯蔵がしやすいこと、お腹の足しになること、などの長所があり、一部地方で民の飢えを救うために、普及に力をつくした為政者がいましたが、多くの場合は人々の口伝で、庶民の間の物流をとおして、知らず知らずのうちに広まってゆきました。

これに対して、さつまいもは甘味があるので、その点ではじゃがいもよりも好まれやすく、生産力も高いので、狭い耕地しかないところでも、割合と多くの人口を養う力があるのですが、寒さに弱いため、暖かいところではないと作れず、収穫したイモが腐りやすく、またところによっては、これを食べると病にかかる、などのうわさも飛び、さらにさつまいもが導入された薩摩の国（鹿児島県）では他藩への持ち出しを厳禁するなど、政治的な規制も加わったため、じゃがいものように知らず知らずのうちに普及するには至らず、こ

れが広く作られるようになるには、有名無名の人々の努力、ときには命がけの劇的な出来ごと、などがありました。

さつまいもが食べて美味しく、ほかの禾穀類よりも安定してとれるために、飢饉対策のための作物として望ましい、などの情報は、当然幕府のお膝元の江戸にも伝えられ、また薩摩から江戸へ回航する船にもさつまいもが積み込まれていて、薩摩藩禁製の品とはいいながら、江戸の庶民もさつまいもを知る機会は少なくはなかったようですが、これを食べると痰の毒にかかるという流言のため、広まりませんでした。何故このような流言が飛んだのかは不明ですが、ひとつには何と見慣れない食べ物であったこと、また運ばれてきたさつまいもが、たまたまあまり美味しくなかったという、いわゆる“あたりが悪かった”ために、そのように伝えられたのかもしれません。

さつまいもが、青木昆陽の努力によって江戸を中心とする関東地方に広く普及するようになったことは、学校の教材にもとりあげられ、一部は本誌でも紹介させていただきましたが（第84号 p 12～19、さつまいもって、すごいね）、昆陽をはじめ江戸の小石川薬草園、養生所内で試作



上 小石川植物園の日本庭園
中 小石川養生所の井戸
下 甘藷試作跡の記念碑（小石川植物園）

し、また苗を下総国馬加村（現千葉市花見川区幕張町）と上総国不動堂村（現千葉県山武郡九十九里町）に配り、くりかえしそこで試作をしています。時代は変わり、これらのところも当時とはすっかり趣をかえています。このたび昆陽が試作した場所を訪ねて往時をしのびました。

3. 多くの人命を救った薬草園、植物園

東京都のほぼ中央、文京区小石川にある植物園は、貞享元年（1684）に幕府の薬草園として設けられ、広さは約48,000坪（15.8ヘクタール）あり、国内各地で収集された薬用植物を、実用として、また研究用として栽培してきました。小石川養生所は薬草園内に設けられましたが、これは貧困者のための施療所で、町医者であった小川笙船の意見により享保7年（1722）に薬草園に併設され、明治維新時に廃止されています。薬草園は維新後に東京帝国大学（現東京大学）の所属となり、小石川植物園と改称され、現在では「国立大学法人東京大学大学院理学系研究科」所属の施設となっています。植物園は関東大震

災（大正12年、1923）と太平洋戦争時の東京大空襲（昭和20年3～5月、1945）と2回にわたり被災し、とくに東京大空襲では設備の相当部分が破壊されましたが、完全に修復されています。

園内にはサクラ、カエデの並木が整備され、日本庭園も設けられ、また多くの巨木があって、マンモス都市のオアシスといった感じですが、現在の薬園保存園は江戸時代からの代表的な薬用植物を集めて栽培し、公開展示されています。このなかには幕政時代から時の推移を眺めてきたサネブトナツメ、サンシュユ、カリンなどの老木もあり、感慨ひとしおでした。また、園内には養生所当時から用いられてきた井戸も保存されていますが、とくに水質がよく、水量も豊富で、前記関東大震災のときには、避難者の飲料水としてたいへん役に立ちました。また広い園内は、二度にわたる災害に際しても避難場所となり、養生所の時代とあわせ、三度も尊い人命を救う役目を果たしてきました。巨木の陰には当時の阪谷 芳郎男爵の書になる大震災記念碑もあって、往時ここに設けられた震災救護所に世

二代目甘藷先生

さつまいも栽培が有利と思われた明治の中頃から、各地の篤農家によって多収技術が考案されてきました。千葉県海上郡海上村の穴澤松五郎は農業に従事するかたわら、さつまいも栽培に関心をもち、安定多収を得るには、小さいながらも良苗を適期に植え付け、面積あたりの本数を多くするのを最良の方策とし、穴澤式育苗法を考案しています。

この小苗を密植する栽培法は、改良を加えて普及指導機関の奨励技術としてとりあげられ、日華事変から太平洋戦争時にかけて、国内ばかりでなく中国華北地方にも広まり、さらに戦後のさつまいも大增産に大いに貢献しました。千葉県では県政に功労があったとして、穴澤松五郎氏を二代目甘藷先生とあがめ、その遺徳をしのんでいます。

話になった人達が、退去するにあたり感謝の念をこめて建立しました。

昆陽はこの薬草園と養生所で享保20年(1735) さつまいもの試作を行っています。試作に際しては、すでに出来上がっている畑を用いるのではなく、荒地を整備し、外来者、動物などの侵入を防止するためにもなみなみならぬ努力を払いました。

桜並木に囲まれた芝生の一角に「甘藷試作跡」の記念碑が建っています。樹木が鬱蒼と茂る一隅にあるため、注意しないと見落としてしまうかもしれませんが、さつまいもの形をして、その肌に似た赤褐色の石でできた碑で、甘藷試作跡の文字もはっきりとはわかりませんが、傍らに次のような解説がありました。「青木文蔵（昆陽）は江戸付近でも甘藷

（サツマイモ）の栽培ができるならば利益も大きく、飢饉の時の食料作物として役立つと考え、享保20年（1735）に幕府に進言し許可を得て、この地で栽培を試みました。この試作は成功し、やがて全国的に甘藷が栽培されるきっかけとなりました。大正10年（1921）にこの業績をたたえる記念碑が建てられました」。

4. 新装成った昆陽神社と有志が守る記念碑

弘化3年（1846）に、（一説では安政4年（1857）に）、青木昆陽をまつる昆陽神社が秋葉神社境内に併設創建されましたが、今年（平成18年）両社ともに建て替えられ、新装成って同年10月8日に、仮り住まいの子守神社から御神体がうつされる儀式がとり行われました。昆陽神社は石段を上ったところに設けられていましたが、このたびは秋葉神社の神殿とならび、平坦の場所に移され、棟には葵の紋が金色に輝いています。広い敷地は地ならしされ、玉砂利が敷かれています、植樹などはまだで、京成電鉄千葉線、京成幕張駅をおりとすぐ眼にうつります。

昆陽神社と向かい合って「昆陽先生甘藷試作之地」の碑が建っています。住宅地の一角の、一戸分ほどの土地に碑は建立されて、扉がついた入り口から両脇にはツツジの植え込みがあり、有志の方々がお守りしているのでしょうか、きれいに整備されていました。碑の裏面には享保20年5月12日栽培とされ、大正8年5月建立、設計者と彫った石工の方の氏名が刻まれていました。この碑が建立された当時は、まだこの付近でさつまいもがかなり広く作られ、それが比較的近年まで続いたのでしょうか、完全に住宅地化され、さつ



昆陽先生甘藷試作之地の記念碑
(千葉市花見川区幕張町)



上 新装なった昆陽神社
下 青木昆陽先生顕彰碑（千葉市花見川区幕張町）

まいもはおろか、他に作物は全く見当たりません。

この「昆陽先生甘藷試作之地」の碑は、まわりを囲まれて一段と高いところに建てられています。それと並んだ平坦な場所に横書きで「青木昆陽先生顕彰碑」が建てられています。当時の友納 武人知事の書になるもので、裏面には「先生は明和6年（1769）10月12日逝去されました。本年は没後200年にあたりますので、その遺徳を顕彰し、これを建立します。昭和43年10月12日 200年記念

青木昆陽先生顕彰会」とあります。

昭和43年（1968）頃は、さつまいもの栽培が減少しはじめた時期ですが、戦中戦後にさつまいもの増産に励んだ方々がまだ大勢おられ、付近には畑も残っていて、昆陽先生に対する思いも強かったことでしょう。碑は広い通りに面し、石堀で囲まれ、鉄の門扉がついていて、入り口には説明板がありますので、注意すれば碑があることはすぐに分かると思います。囲いと門扉は昭和47年3月、千葉澱粉共同組合によって奉納されました。

昆陽は苗をつくり、これを小石川薬草園、養生所に造成した畑に植えたばかりでなく、江戸付近の農村にも配りましたが、下総国馬加村、上総国不動堂村にもこのときに配られています。そして馬加村では好成績をおさめ、それ以来次第にさつまいも栽培も伸び、生産されたイモは

江戸にも運ばれるようになったほか、後に天保年間（1830～1844）にはさつまいもからでん粉が作られるようになりました。このようにして、この地域でのさつまいもの生産は戦中戦後を経て昭和40年代まで続き、全国的に有名な産地の一つとなっていました。いまでは前述のようにさつまいも試作地付近でも栽培は全くなく、また、さつまいもを使用した名産品もなく、ただ昆陽神社と記念碑だけが往年のさつまいもの試作地、大産地であったことの証しとして残されています。

5. イワシの村での試作と赤松代官の尽力

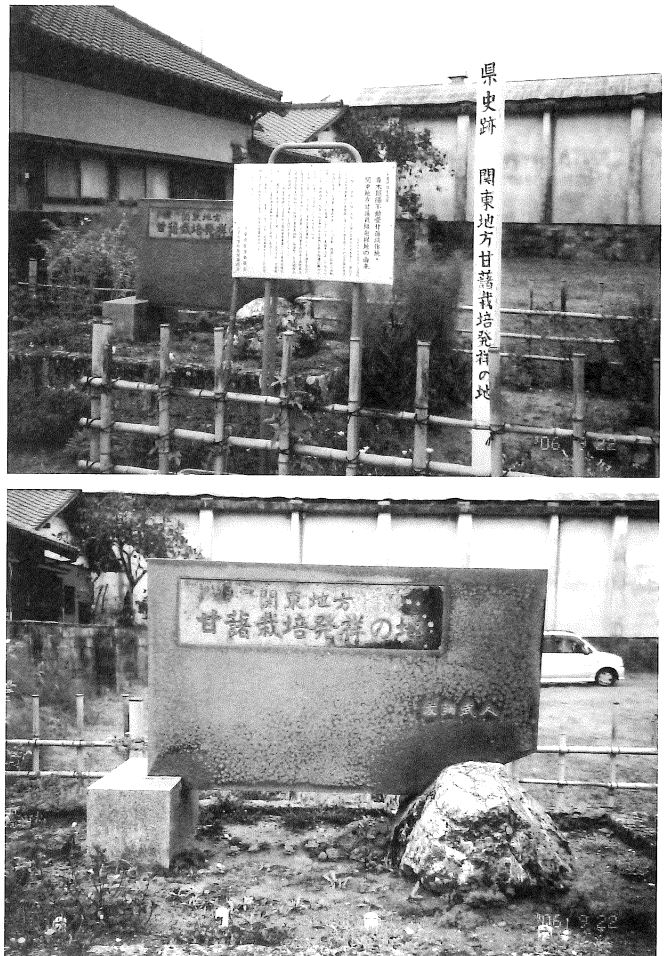
昆陽によるさつまいもの試作は、江戸南町奉行大岡忠相給与力の給地であった、上総国不動堂村でも行われました。不動堂村の上総方代官赤松源之進典村は、領主から授かったさつまいものを近隣の農家に配り、その栽培指導に専念しました。

馬加村で成功したさつまいもの試作は、しかしこの不動堂村ではうまくゆかなかったようです。いろいろの原因が考えられますが、この村は当時も、また現在でも、全国有数の漁獲高を誇る“イワシの町”で、その豊不漁は暮らしにたいへん大きく影響しますが、ちょうどさつまいもの試作が行われたときには、不運にもイワシがとれず、これはさつまいもを作った“たたり”である、との流言が飛び交い、さつまいもに対しての忌避感が強かったからであろう、と言われていました。また、馬加村では水田が少ない一方、さつまいも栽培に適した壤土層が広がり、畑作が盛んであったために、比較的すんなりとさつまいもが受け入れられたのに対し、不動堂村は漁業が主な生業で、しかも耕地としては水田が多く、畑地が少ないなど、畑作への認識が高くなったことも影響し、赤松代官ほかの尽力にもかかわらず、成功しなかったのかもしれない。

しかし、作物は地上に実をつけるもの、との観念をもって

た農漁民は、得体の知れない実らない作物を処分しようとして畑から引き抜いたとき、地下にできているさつまいものを発見し、驚いたに違いありません。このような、現在からみれば笑い話のようなことが、この地ばかりでなく、さつまいもが普及してゆく段階では、全国各地で見られたことでしょう。

JR東金線（成東－大網間）東金駅から海岸に向かう九十九里鉄道バス、豊海小学校前停留所の傍らに「関東地方甘藷栽培発祥の地」



上 下 関東地方甘藷栽培発祥の地の記念碑
(千葉県山武郡九十九里町不動堂)

の碑が建っています。当時の友納 武人千葉県知事の題字により、昭和43年（1968）に明治百年祭事業として、さつまいも試作に力を尽くされた赤松源之進代官の子孫の方の邸宅の一部を選んで建立されました。成否はともかく、はじめてさつまいもが試作され、人々がこの作物に接し、次第に普及してゆく出発点になった、とのことでは馬加村も不動堂村も変わりはありません。現在の幕張町とは異なり、不動堂では周囲に水田が多く、都市化してはしないものの、畑は少なく、さつまいもは農家の方々が自家用につくるくらいで、経済栽培はされておらず、また、さつまいもを原料とした名産品などもつくられていません。

6. 他にもいる、さつまいも普及功労者

試作地付近では、現在さつまいもはほとんど作られていませんが、関東地方一円では、往年のように大々的な栽培地域は少なくなっているものの、とくに青果用さつまいもの生産では、茨城県、千葉県をはじめとする、全国に名だたる産地があり、作りつづけられています。これにはいろいろの要因がありそうですが、大消費地に近いなど、経済的条件のほか、壤土層が広く分布しているなど、栽培に適する条件が整っていることもその一つと考えられ、これらの地での試作に努力した青木昆陽は、やはりさつまいも普及功労の第一にあげられるべきでしょう。

しかし、幕府その他公のバックアップがなく、飢えを救おうとして「薩摩藩禁制のさつまいも」を密かに持ち出して普及をはかった個人が各地、とくに西日本にいたことも忘れられない事実です。これによって、知らず知

らずのうちにさつまいも栽培が広まっていった地方では、のち全国的な大飢饉が発生した際にも全く飢えを知りませんでした。昆陽が試作した関東の地で、さつまいもがかなり普及したとみられる天明、天保の大飢饉（天明2～7年、1782～87、天保4～7年、1833～36）に際して多数の餓死者がでたのは、この飢饉の規模があまりにも大きく、広範囲で、しかも長く続いたためで、まことにいたましい限りです。

「甘藷栽培発祥の地」訪問にあたりましては、千葉市幕張公民館の皆様、九十九里町不動堂在住赤松 正保様から懇切なご案内と、数々の資料の提供をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

編集 吹く風は冷たいながらも、空は澄みわ
後記 たりました。遠目には赤い花と見まが
うばかりのカキの実が、葉を落とした
枝々にびっしりとついています。あまりにも高
い木なので収穫をあきらめたのでしょうか。そ
れとも忙しい仕事にまぎれて、忘れていうち
に熟柿になったのでしょうか。メジロが数羽つ
いばんでいましたが、大きなヒヨドリの姿を見
つけたのか、あわてて傍らのサザンカの葉陰に
かくれました。のどかな農村の冬の一コマです。

いも類振興情報 第90号

平成19年1月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1225
振替 00130-1-110152
印刷所 JTB印刷株式会社